

ユーザーストーリー

— キンバが叶えてくれたこと（上） —

リオパラリンピック選手村での出会い

2016年9月、リオパラリンピックの選手村にあるオートボックの修理ブースで、Y様という一人の男性が声をかけて下さいました。Y様は海外出張で修理ブースを訪れることが決まっていたのですが、実はY様は個人的に、オートボックにどうしても伝えたい思いがあったそうです。

Y様のお子様は「先天性中枢性低換気症候群 (CCHS)」という難病を抱えており、生まれたときから呼吸器をはじめとする様々な医療機器が手放せない状態でした。

しかし主治医の先生のアドバイスと励ましのもと、Y様はお子様にできるだけたくさんの経験と社会参加の機会を作ろうとしました。それが、お子様自身の発達において、非常に貴重な要素になると考えたからです。

キンバとの出会い

そんな中、必要な医療機器を搭載して移動できるツールとして出会ったのが、「キンバ」というオートボックのバギーでした。お子様にとって「命であり肺でもある呼吸器が壊れてはいけない」、と感じていたY様は、キンバを初めて見て「頑丈だな、信頼できるな」と思ったそうです。人工呼吸器/吸引機とともにお子様を乗せると、やはり重いと感じたそうですが、それよりも、お子様を外に連れ出せることの喜びが上回ったと言います。



1才 在宅医療の様子



2才 入院先で



2才 在宅医療の様子

成長をキンバと共に

それから10年あまり、Y様のお子様は普通校に通う小学6年生になり、ご家族・友人とともに楽しい毎日を過ごしています。人工呼吸器が生涯必要なことは変わりませんが、寝る時は自分で呼吸器を着けているそうです。

ご家族をはじめとする多くの方々のサポートに加え、「キンバ」というバギーが非常に大切なツールとしてお子様の生活と発達を支えてくれたこと。Y様はその感謝の気持ちを是非とも伝えたいと、修理ブースで声をかけてくれたのでした。

リオからの帰国後、改めてY様からお聞きしたエピソードを、この後の記事で皆様にご紹介させていただきます。



バギー キンバネオ



1才 図書館へ